

氏名	小 坂 義 樹
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	博乙第 1927 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和 63 年 9 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	先天性股関節脱臼 保存的治療で経過が順調でなかった症例の股関節造影所見
論 文 審 査 委 員	教授 青野 要 教授 寺本 滋 教授 折田薫三

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

股関節造影をもちいた先天股脱の予後に関する研究は多数あるが、一応の整復位がえられた症例で保存的治療終了後の股関節造影所見からその予後を予知したり、補正手術の適応を決定する研究は少ない。

岡山大学整形外科学教室において、保存的治療を行い一応の整復位がえられたと考えた先天股脱および先天股亜脱例のうち、その経過に問題があって 5 才未満に股関節造影を施行した 75 例 86 股のうち 10 才時に予後調査ができた 58 例 69 股を研究対象とした。10 才時に Severin によるレ線評価を行い、さかのぼって、評価別に保存的治療終了後の股関節造影像を分析し、次の知見をえた。

1) 保存的治療により一応の整復位がえられたと考えた症例のすべてのものが 10 才時に予後良好であるとは限らない。2) 単純レ線像で 5 才未満に α 角が 28.0° 以上または CE 角が負である症例は股関節造影による検討が必要である。3) 補正手術の適応は①臼蓋形成不全、 α' 角が 11.6° 以上または α 角が 30° 以上のもの ②関節内介在物のあるもの。4) 骨頭の求心性を妨げる関節内介在物のある症例の 10 才時の予後は不良で、関節包外の補正手術では対応できず、これを剔出する必要がある。軟骨性臼蓋の厚さが Y 軟骨部で 3.0 mm 以上、恥骨坐骨部で 3.2 mm 以上、腸骨部で 5.2 mm 以上の症例は予後不良である。5) 股関節造影像で予後不良と考える症例に適切な補正手術を追加すればその予後はかなり改善される。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は先天性股関節脱臼の中で保存的治療で経過が順調でなかった症例の股関節造影所見について検討を行ったものであり、5 才未満に股関節造影を施行した 75 例 86 股の

うち10才時に予後調査ができた58例69股を研究対象とし10才時に Severin によるレ線評価を行い，さかのぼって評価別に保存的治療終了時の股関節造影像を分析している。その知見は整形外科的にまことに重要にして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の称号を得る資格があると認める。